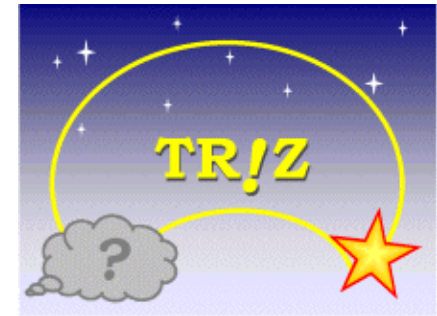


第39回 日本創造学会研究大会 2017  
2017年9月9日(土)～10日(日)  
慶応義塾大学 日吉校舎 (横浜市港北区)



人類文化の主要矛盾「自由vs愛」を考察する

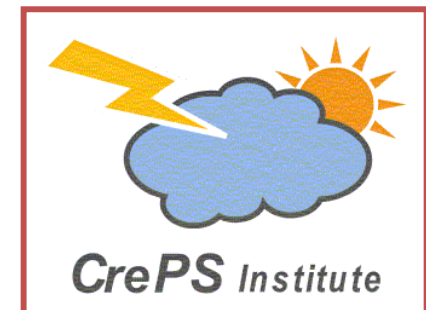
(2) 個人における

「自由vs愛」の矛盾・葛藤と「倫理」

2017年 9月10日

中川 徹

(大阪学院大学 & クレプス研究所)



## はじめに : (趣旨とアウトライン)

本研究は、輻輳した社会的な問題に、  
「創造的な問題解決のための方法論TRIZ／CrePS」を適用し、  
人類文化の根本にある矛盾を明確にした、という報告です。

- (1) 「創造的な問題解決のための一般的な方法論(CrePS)」を作った。  
各種の創造性技法、問題解決技法を統合して、「6箱方式」を作った。  
技術分野、ビジネス分野などに限らず、一般的に使える。
- (2) 実際の社会的な問題に適用することを試みた。  
「日本社会の貧困」をテーマに選んだ。  
藤田孝典著『下流老人——億総老後崩壊の衝撃』(2015) を、「見える化」した。  
読者レビューの根底に、「自己責任論」と「助け合い精神」との対立を見た。
- (3) 根源には、「自由」と「愛」の葛藤・対立(=矛盾)がある、と認識した。  
「自由」= 自分で判断・行動し、「生きる」こと。 人類文化の第一原理。  
「愛」 = 子と家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」こと。人類文化の第二原理。  
「自由」と「自由」、「愛」と「愛」、「自由」と「愛」が対立する。  
=> 「自由 vs. 愛」を「人類文化の主要矛盾」と名付けた。  
両者を支え、動機づけ、調整するもの => 「倫理」(人の道、「良心」)

#### (4) (主要矛盾)「自由 vs 愛」の問題を考察した。

##### 人類文化を通じて未解決である理由

- (a) 最も基本の個人(間)のレベルで、「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。
- (b) 種々の社会組織における「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。
- (c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に反する行動をとり、それが社会的な「勝者」になることがある。
- (d) (c)の状況が、至る所にあり、かつ、歴史的な積み重ねをもっている。

##### 個人レベル(a)に焦点を当てて、考察を深めた。

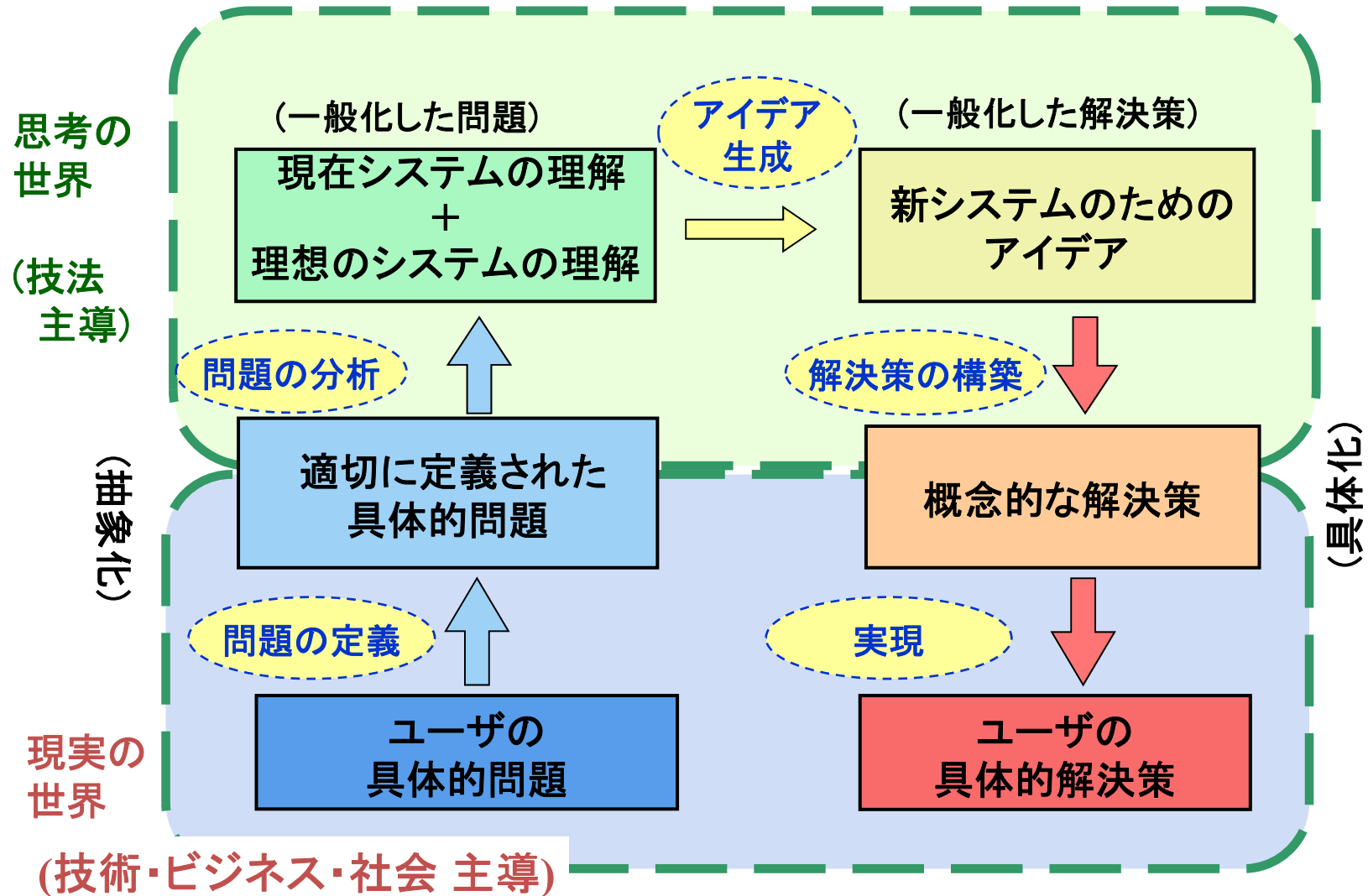
個人の成長過程と「自由、愛、倫理」の意識・理解の変化を考察。

「自由、愛、倫理」の全体構造を「見える化」した。

#### (5) 基本仮説を以下の点で推敲・拡張した。

- ・ 「倫理」(とその深化)が人類文化の第0原理である。
  - 欲・欲望を「悪の心」から「善の心」に向けさせる指針。
  - 「すべての人の本質的平等」、「基本的人権」が歴史的に明確に
- ・ 第1原理「自由」は、革新・創造をもたらすと共に、勝者の支配・保守を生む
- ・ 第2原理「愛」は、奉仕・協調を旨とするが、外部から守るために対立を生む
- ・ 「自由」同士、「愛」同士、「自由」と「愛」間に、さまざまな矛盾の形態がある
- ・ 「倫理」が不十分のとき(「悪の心」が潜むとき)、「自由」も「愛」も本質的に損なわれる。
- ・ すべての行動や社会ルールに「倫理」を浸透させることが、  
人類文化の主要矛盾「自由vs愛」を克服する方向である。

## 創造的問題解決の新しいパラダイム (CrePSの「6箱方式」)



TRIZを始め、各種の創造性技法、問題解決技法を統合して、「6箱方式」を作った。  
技術分野、ビジネス分野などに限らず、一般的に使える。

# 創造的問題解決の方法を 社会的問題に適用する

社会的問題は技術的問題よりも、幅蕪した大きな問題である。

いままでに沢山の政治家・実業家・専門家が取り組んできた。

非専門家／素人である自分がどのように、取り組めばよいか？

まず、一つのテーマを選んで、問題の状況を知ることから始める。

まず最初に、高齢者の貧困をテーマに取り上げた。

そして、それが「日本社会の貧困」という

テーマの一部であると認識した。

藤田孝典著『下流老人』(2015)を テキストに選んだ。

その論旨を「見える化」し、24頁の冊子を作った。

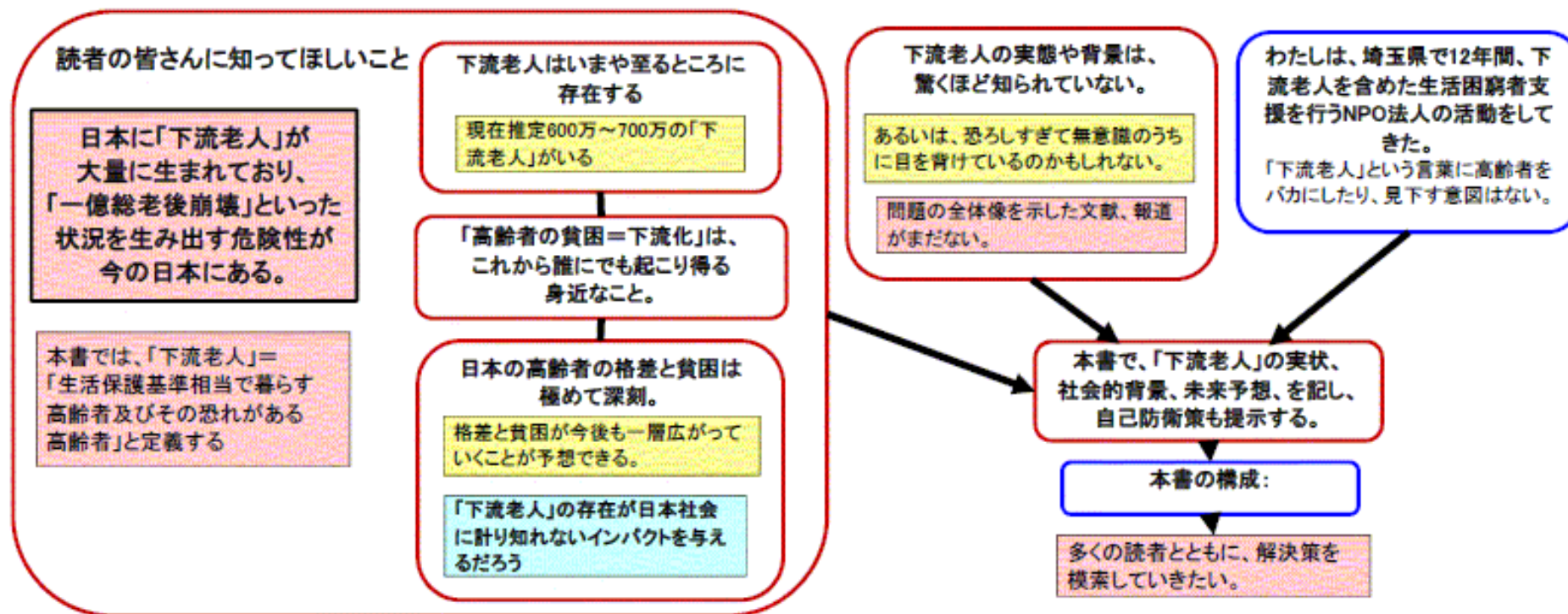
問題の状況を、構造的に見ることができる。



# 「見える化」した例: 『下流老人』(藤田孝則著)の「はじめに」

『下流老人:一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典 (朝日新書、2015. 6.30) (0) 「はじめに」

「その論点のまとめと可視化 (「札寄せツール」による図示)」 (中川 徹、2015. 9. 2) 「見える化」した要約版 (2015. 9.11)



『TRIZホームページ』(編集: 中川 徹)に掲載 (2015. 9.17)

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

『下流老人』(藤田孝典著、2015)に対する Amazonサイトでの読者の書評:

全82件(2016年3月): 高評価(星5-4) 多数 <====> 低評価(星1-2) 多数。

低評価の読者の意見(例)	私の感想/コメント
身勝手な人生を送って貧困になったような人も、当人の責任でなく、社会のせいになっている。	事例は身勝手な例ではないが、判断ミスはあったと、わたしは思う。人生にも社会にも沢山の落とし穴がある
個人の責任を追及せず、社会が悪いと言っている。	沢山の人がこの感想を持っています。それは、競争社会で「勝つ」ことを教えられ、「負けた者が悪い」と考えるようになっているからです。競争社会の欠陥をどう補うのか？
社会保障へのタカリを薦めており、放置すれば国が破たんする。	基本的人権の精神をどのように実現するのか、政策の問題も。
福祉は性善説だけでなく、性悪説も考慮しないと、世間は納得しない。	たしかにこれが重要点。ギリギリのケースとタカリのケース。現在でも対処していること。
解決策は市場経済と民主主義を否定するもので、非リアルである。	今の市場経済が本当に望ましいのか(修正すべきでないか)、きちんとした社会保障こそ民主主義を実現するものでないか、とわたしは思う

## 私が考えたこと:

「貧困」に関する議論の根底には、人々の心理・理解に大きな未解決のことがある。

競争社会における「勝ち負け」と「助け合い」に関わる考え方が、未解決である。

一方で、競争は、勝ち負けの世界、自己責任だという世界。  
もう一方で、助け合い、協力、生活保障、福祉を考える世界。

人々の社会的な理解において、この二つの両立が、共通の理解になっていない。

社会的思想、社会倫理として十分に解明されていないからだ。

突き詰めると、「自由」と「愛」という重要な標語に到達する。

この「自由」の考え方と、「愛」の考え方とが対立していて、  
その調整のしかたが、共通認識になっていない。(日本でも世界でも)

これは、個別事例の対立ではなく、もっともっと深い問題である。

==> 「自由」と「愛」の対立は、実は「人類文化の主要矛盾」であり、  
その矛盾を解決することが、「人類文化の主要課題」である。



# 基本仮説：「自由」vs.「愛」が人類文化を貫く主要矛盾

前報： 中川 徹 TRIZシンポ2016

(1) 人類の文化は、「自由」を第1原理とし、その伸長を主要目標とする。

各人が、自分で判断し、行動し、「生きる」ことである。

「自由」は、(自然的、社会的な)「競争に勝つ」ことを目指す。

一人の「自由」と他者の「自由」とは、必然的に衝突(矛盾)する。

(2) 人類の文化は、「愛」を第2原理とし、その普遍化を主要目標とする。

各人が、その子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」ことである。

「愛」は、「自由」を自制して、「自由」同士の衝突を無くすことを目指す。

「愛」は、「身内」を助け・守るために、「外」からの攻撃に対抗する。

それは、一つ上の社会レベルでの「自由」と「競争」を出現させる。

(3) 「自由」vs.「愛」が、「人類文化を貫く主要矛盾」である。

「自由」同士、「愛」同士、「自由」と「愛」の間に、さまざまな矛盾がある。

(4) この「自由」と「愛」との両方を包含して動機づけ、その間の調整を行う指針として人類文化が獲得してきたのは、「倫理」である。

平たく言えば、「人の道」、「良心」。

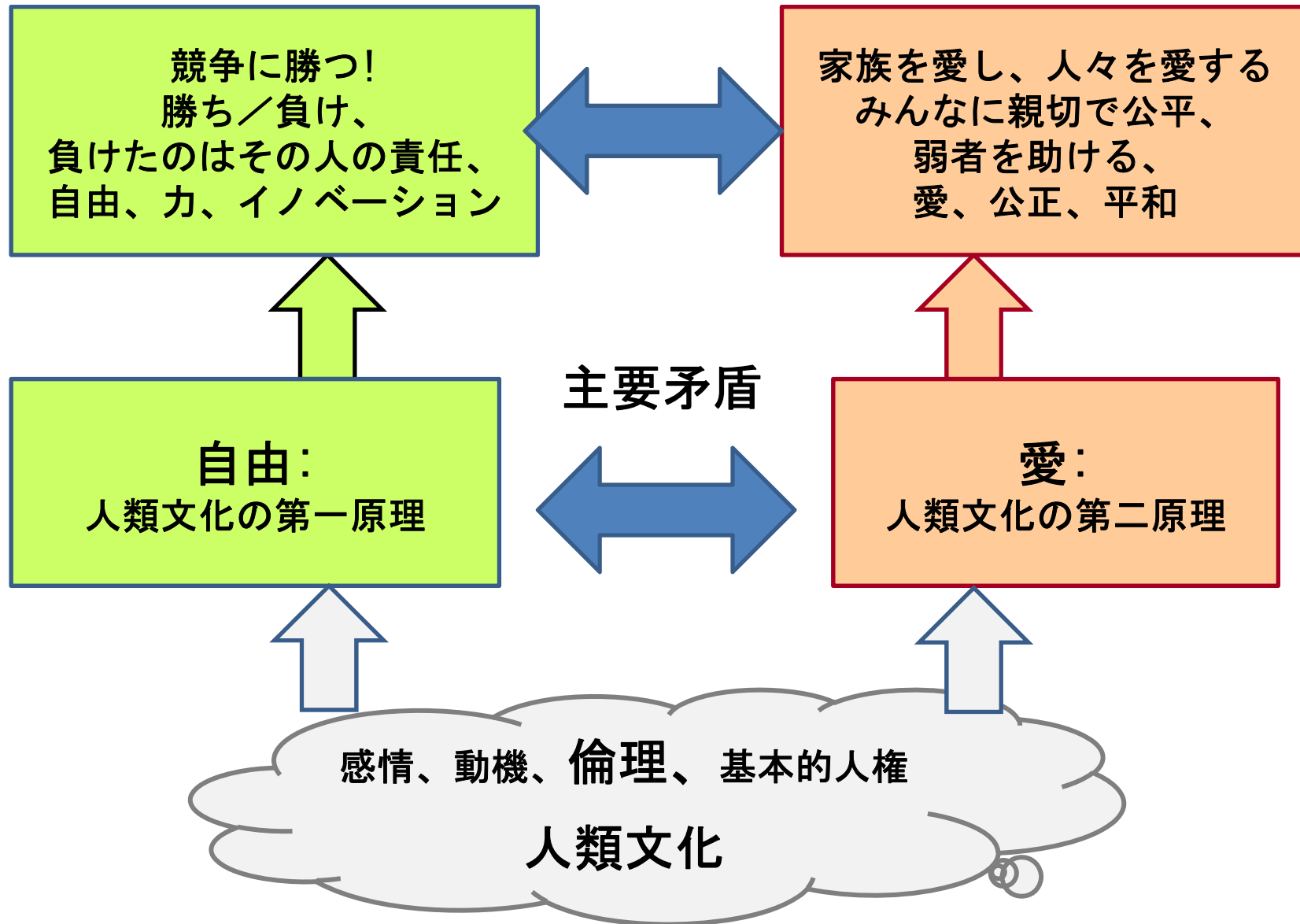
「倫理」の根幹部はすでにDNAに埋め込まれていると考えられるが、当たり前すぎて、明示することが難しい面がある。(2016)

「基本的人権」の概念は、この「倫理」の一部が明確化されたもの。

注： 倫理について、（特に、先天性と後天性の区分）  
その後（2017）新しい認識を得た。（後述）

# 「自由」vs「愛」: 人類文化の主要矛盾

2016.10.25 中川 徹



- (5) 人類は、さまざまな社会システムを形成し、高度な文化を生んだ。  
しかし、「自由」vs.「愛」の「主要矛盾」は、まだ解決されていない  
経済、政治、・・・、言語、宗教、社会思想、科学技術、芸術、・・・  
「主要矛盾」は至るところに在り、生まれ、大規模化し、深刻化している。

(6) 「人類文化の主要矛盾」の解決を困難にしている理由：

- (a) 最も基本の個人(間)のレベルで、  
「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。  
人間性における「欲」「悪」の問題も。人々が、知性よりも感情で動かされる。  
人々が出生以来のさまざまな体験で考えが形成・制約される。
- (b) 種々の社会組織における「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。  
グループ、組織(企業、政党など)、地域共同体、国 など。  
これらのありかた(社会的「倫理」)の理解が世界的に共有されない。
- (c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に  
反する行動をとり、それが社会的な「勝者」になることがある。  
社会的「勝者」が、自分に都合がよい社会システムを構築する。
- (d) (c)の状況が、小さいものから大きなものまで至る所にあり、かつ、  
歴史的な積み重ねをもっている。  
(いつの時代でも) 社会システムが(社会的)「倫理」に合わない面がある。  
いままで虐げられていた人々が(c)の行動をとり、対立・闘争が起こる。

以上が2016年の段階

本報で、上述の基本仮説をさらに深く考察した。(2017)

個人(および個人間)のレベルを中心にして、  
「自由・愛・倫理」の関係を矛盾とその克服の観点から考察する。

個人の成長段階における、「自由・愛・倫理」の認識と課題

乳児・幼児期 -- 「しつけ」 基本的な考えが植えつけられる

学童・少年期 -- 「教育」による理解の形成、「親離れ」と自立志向

青年期 -- 自覚的な理解の形成、「性格・人格」の形成、実践の初期

壮年期 -- 現実の社会での実践、理想主義と現実主義の葛藤

老年期 -- 現実の社会からの漸次引退

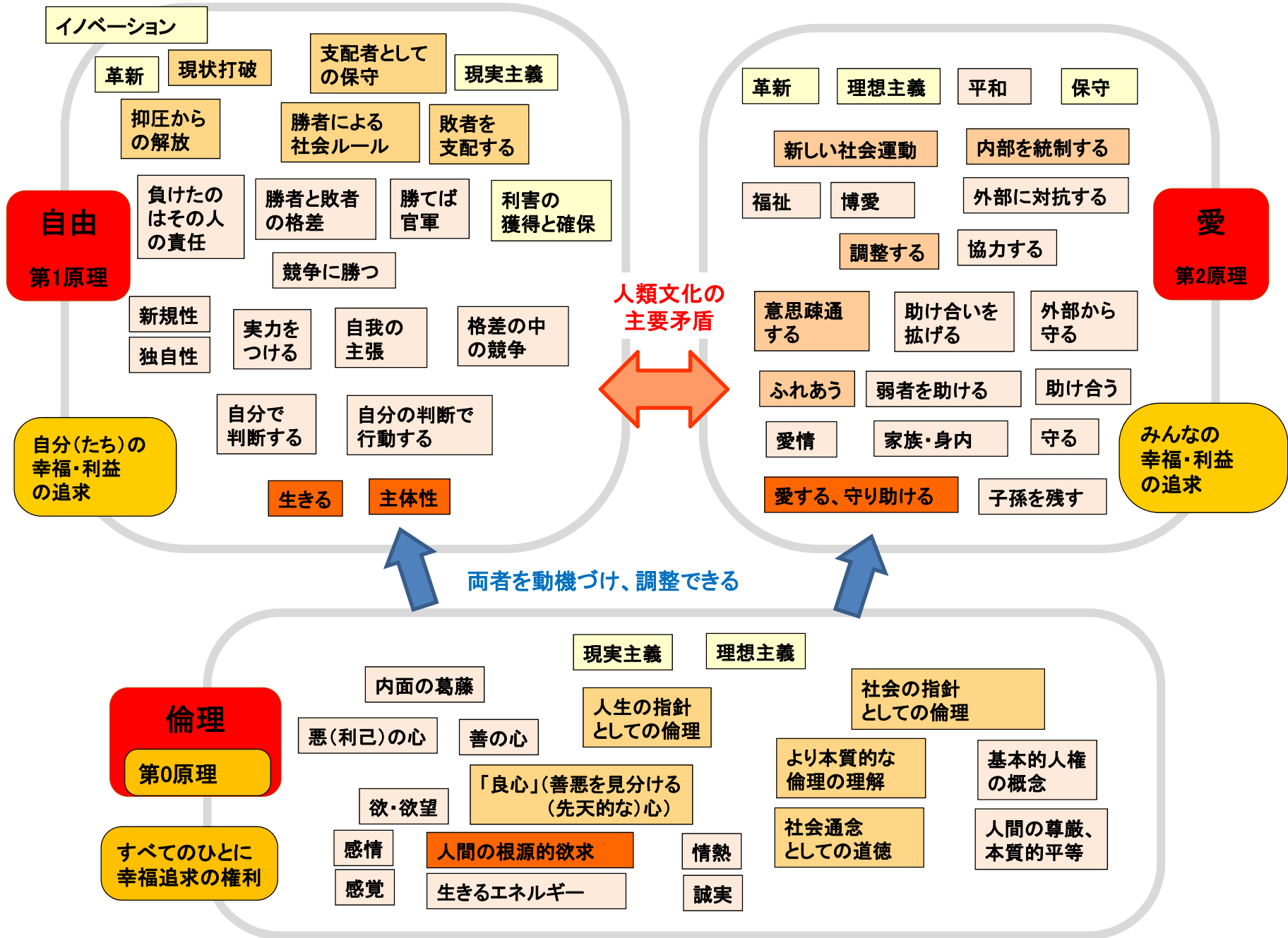
関連するキーワードを集め、札寄せ法でその構造を「見える化」した。

「自由・愛・倫理」の内部構造と相互関連が見えるようになる。

基本仮説: 人類文化の主要矛盾「自由 vs 愛」を推敲・拡張した。

特に、「倫理」の重要性を理解し、これを第0原理と呼ぶ。

# 人類文化の主要矛盾：「自由・愛・倫理」の構造（個人(間)のレベルを中心に）



# 「自由vs愛」の矛盾・葛藤と「倫理」 ――その考察

## 1. 人類文化の第0原理：「倫理」

### 1.1 「倫理」：人の内面の根底にあり、善悪の考えと、人生・社会の指針を示す。

人の内面の根底は、感覚と感情をベースにし、「欲・欲望」を含む。  
それは「善の心」の基でもあるが、「悪の心」にもつながる。  
何が「善」で、何が「悪」であるかを示すのが、「倫理」である。

### 1.2 「倫理」は後天的(歴史と社会に依存)だが、「良心」は先天的である。

「倫理」の中身(何が「善」で何が「悪」か)は、時代と社会で異なる。  
「倫理」は社会が作り教えたもの。人類文化の歴史と共に発展してきている。

「良心」＝「内心において善悪を見分ける心の能力」 が人類共通で先天的。  
(通常は、「内心にある「善の心」」の意味に使うが、本研究で定義しなおす。)  
(参考：赤ん坊はどこで育てられても、育てられた環境の言語を話せるようになる。――言語獲得能力は先天的、言語そのものは後天的。)

### 1.3 「倫理」は人類文化の土台であり、「人類文化の第0原理」と名付ける。

人類文化は「倫理」を土台にして、「自由」の伸展と、「愛」の拡張を目指してきた。  
「自由」と「愛」の中のさまざまな対立・矛盾を調整する拠り所は、「倫理」である。

#### 1.4 「倫理」の中核概念は「基本的人権」である。

旧来使われてきた「道徳」という語には、旧来の身分関係・上下関係を前提とした社会ルールへの「従順」のニュアンスが強い。

しかし、人類文化の歴史の中で「(人間の本質的な)平等」という概念が得られた。それを中心にした「基本的人権」が、現代の人類文化の「倫理」の中核概念である。

#### 1.5 第0原理「倫理」の本質 = 「すべての人に幸福追求の権利がある」



## 2. 人類文化の第1原理: 「自由」

人類の文化は、「自由」を第1原理とし、その伸長を主要目標とする。

### 2.1 「自由」 = 「自分で判断し、自分で行動して、生きる」こと

自分で「主体的に」ベストと思う判断をし、行動する。その責任は自分で負う。  
どの行動にもさまざまな影響やリスクがあるから、成功することも失敗することもある。  
それを承知で、よく考えて(判断し)行動することが、  
個人の生きる可能性を最大化し、人類文化を新たに発展させていく。

### 2.2 「自由」同士が対立: 必然的に「競争」が起き、「競争に勝つ」努力をする

各人の「自我の主張」(「自由」)は、「欲しいもの」が有限だから、必然的に対立する。  
「競争」が現れる。「自由」は、「競争に勝つ」ことを目指す。  
知力・経験・体力・資源などを予め準備し、適切に判断・行動しなければならない。  
「勝者」は自分が欲していたものを獲得し、「敗者」はそれが得られない  
(最悪の場合には自分の生命をも失う)。  
「競争」により「強い者(実力を持つ者)」を勝ち残らせることは、生物界の大原則。

### 2.3 「競争社会」では「格差」が拡大していく

「競争に勝つ」ことが目標になると、「競争」はどんどん熾烈になる。  
(例: 受験競争、商品の価格破壊競争。人間の金銭欲には際限がない。)  
「競争」が激しくなると、「弱肉強食」のぎすぎすした社会になる。  
(競争を繰り返すと)勝者と敗者の立場の差が「格差」として拡大していく。

## 2.4 「社会的勝者」による「支配」：新しい「社会ルール」とその「保守」

(いくつもの)競争に勝った「社会的勝者」は、「社会的敗者」を「支配する」。「勝者」が自分たちに都合がよいように、「社会ルール」を作る。「勝てば官軍」  
(個人レベルでの例：子供の中でのガキ大将、少年期に顕著ないじめ、など)  
「勝者」は、自分の体制の温存・現状維持を望む。「保守」、「現実主義」の立場)

## 2.5 支配された状況からの「解放」と「革新」の運動

一方、「社会的敗者」は、支配・抑圧された状況から「解放」されることを望む。現状の打破、現在の社会ルールの「改革」が、「自由」が目指す目標になる。「革新」、「理想主義」の立場である。「革新」が歴史の発展を特徴づけてきた。

## 2.6 人類文化における「革新」：「自由」の意義

科学技術や芸術などでも、「自分で判断し、行動する」ことが、文化的な発展を生む。独自性、新規性のある科学認識や技術や芸術、「イノベーション」を生む。「自由」が人類文化を発展させるための重要な原理であると認められる。

## 2.7 第1原理「自由」の本質 = 「自分(たち)の幸福・利益を追求する」

### 3. 人類文化の第2原理:「愛」

人類の文化は、「愛」を第2原理とし、その普遍化を主要目標とする。

#### 3.1 「愛」＝「各人がその子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、助け、守る」こと

その原形は、母の子に対する「愛情」。

生き物としてのヒトがその子孫を残すために、子を守り育てる本能的行為。

「愛」を、家族・隣人に及ぼし、さらに広くすべての人に向けることが、普遍化の目標。

#### 3.2 「愛」は、「助け合う」、「与える」、「協力する」。

「愛」は、弱い者、困っている者に対して、助ける。

さらに相互に助け合う、双方向に広く助け合うことが「愛」の本来の目標である。

そのために、人に触れ合い、コミュニケーションをし、お互いを理解して、「協力する」。

#### 3.3 「愛」は「調和」を求め、一部の「自由」を抑制して、調整する。

「愛」は、人々の「調和」を求めるが、人々の「自由」の主張の違いが大きいと困難に。

自己主張する人を「なだめ」て、グループ内に留まらせるのが一法。

一人の主張を認めて、他のメンバーに理解を求める(「なだめる」)のが別法。

「愛」の「調和」志向が、グループメンバーの「自由」の間に「妥協」を作ろうとする。

#### 3.4 「愛」は、多様性(多様な「自由」)を尊重した「協調」を見出す。

グループの各メンバーが互いの主張や利害の違いを認めたくえで、

相互に相手を尊重し、グループとして「協調」、「相互協力」する。

互いの違いが相互の弱点を補い、よりよくしていくことを認識すると、実現できる。

また、一部の自己主張(「自由」)が新しく有益な場合には、

その部分を従来グループから「独立」させ、(緩い)連携を持つことも有益。

### 3.5 もう一つの「愛」の原形： 性愛・恋愛・結婚

「愛」のもう一つの原形には、子孫を作る生殖のための性愛がある。  
生き物としての本能の一つだから、性欲も対象者選びも本能的・感情的な面が強い。  
排他性・支配欲が伴い、相手を巡って他者と強い競争関係になることも多い。  
良い伴侶を得て、結婚し、結婚生活を全うすることは、人生の大きな課題であり、  
社会的安定の基礎でもある

### 3.6 「愛」は「身内」を守るために、「外部に対抗する」性質がある。

守るべきメンバー（「身内」）を明確にし、外部に対して「壁」を作り、「対抗」する。  
結束するために、「身内」の意見や行動を統制する（「自由」の束縛）ことがある。  
「保守」、「現実主義」の立場である。

### 3.7 「身内」を守ろうとする「愛」は、一つ上の社会レベルで「対立」を作り出す。

（例：一つの国民の「愛国心」と隣国の国民の「愛国心」とが戦争を引き起こす。）

### 3.8 「博愛」： 弱者の救済、「格差」の是正による、社会「革新」の運動

すべての人に「愛」を及ぼすこと（「愛の普遍化」、「博愛」）は、「愛」の本来の目標。  
社会の「格差」の中で恵まれない人々（「弱者」）に、「助け」を及ぼそうとする。  
現実社会をそのように変えていこうとするのは、「革新」と「理想主義」の立場である。  
その視野が国際的・世界的になるとき、「平和主義」につながる。

### 3.9 第2原理「愛」の本質 = 「みんなの幸福・利益」を追及する

「みんな」として認識されている人々の範囲（広い意味での「身内」）が問題。

## 4. 「自由」と「愛」の対立・矛盾

「自分(たち)の幸福・利益」(「自由」)と「みんなの幸福・利益」(「愛」)との対立・矛盾。

### 4.1 ある人の独自の判断と行動(「自由」)を、別の人(「愛」)が止めようとする。

周りの(特に保護的・指導的立場の)人が、「危うい、誤っている」と考える場合。「あえてリスクを取り、行動することが、将来の成功の糧だ」という主張(「自由」)と、「失敗は目に見えている、ダメージが大きいためやめよ」という助言(「愛」)の対立。どちらが適切かは、場合によって異なる。

### 4.2 「助け合い」「協力」を求める「愛」に、「自由」が協力を拒否する。

「みんなの幸福・利益」のために「助け合い」や「協力」を求める「愛」に対して、メンバーが「自分の利害に合わない」として拒否する(「自由」)場合。「自由」は「自分の幸福・利益」を最大限に求めるから、この対立はしばしば起こる。

### 4.3 「勝負」「戦い」での決着(「自由」)を、「愛」は「平和的に」避けようとする。

「自由」同士が「競争」「戦い」によって「勝ち負け」をつけようとするのに対して、「愛」が、「勝負」「戦い」を避けて、「調整」「協調」「平和」の実現を望む場合。「愛」が「調停者」として双方から信頼され、「調停案」が双方を納得させる必要。

### 4.4 「社会的勝者」が作る「社会ルール」に、「愛」が異議を申し立てる場合

「社会的勝者」の「社会ルール」や支配体制(「自由」)が、「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして、「愛」が反対する場合。「愛」の反対の意思表示は、新しい社会運動になることがある。

#### 4.5 「抑圧からの解放」の運動(「自由」)に、「愛」が反対する場合

「社会的敗者」が「抑圧からの解放」を掲げて、「革新」の運動を起こす(「自由」)とき、「愛」が、その趣旨には同調しても、その運動の目標や手段が「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして反対を表明する場合。

#### 4.6 「愛」が「身内」の団結を求めて、メンバーの「自由」を束縛する場合

「外部」からの脅威や攻撃に対抗するために、「愛」がその「身内」の団結を求め、メンバーの「考え」や「行動」を統一・制約しようとする(「自由」を束縛する)場合。

#### 4.7 「愛」の「身内意識」が、外部の人の考え・行動(「自由」)を排除する場合

「愛」の「身内意識」が強く、偏狭である場合には、「身内」以外の人をはじき出され、「外部の人」の「考え」や「行動」(「自由」)が認められず、対立が起こる。

## 5. 「自由」と「愛」に対する「倫理」の役割

「倫理」は、「自由」と「愛」の両方を「動機づけ」、「自由vs愛」の主要矛盾を「調整」する。

### 5.1 「倫理」自身の理解が、人類文化の歴史の中で発展してきている。

「何が悪で、何が善か」を示し、「悪から善に向かわせる指針」が「倫理」である。「倫理」の中身は、時代と社会で異なり、人類文化の歴史と共に発展してきている。各個人は「倫理」を後天的に学ぶ(社会から教えられる)。

### 5.2 個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されることが重要。

個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されていることが、「自由」と「愛」が本来の姿で(各個人と社会により)実践されていくために重要である。「自由」の中、「愛」の中、「自由」と「愛」の間にある対立・矛盾を緩和・解決する鍵である。

### 5.3 不十分な「倫理」(の理解)は、「自由」の精神・実践を損なう。

「主体性」を損なう <== 消極的、無気力、他人依存、無責任、付和雷同、など、  
「独自性、新規性」を損なう <== 先例踏襲、ありきたり、二番煎じ、模倣、など  
「挑戦的」を損なう <== 無難、萎縮、責任回避、など。  
「競争」が不適切に <== 裏口入学、ドーピング、判定操作、ルール違反、買収、収賄。  
「自分の利害の獲得」を不正に <== 脅迫、買収、文書偽造、詐欺、強盗、殺人、など。  
「新しい社会ルール」作りを不適切に <== 奴隷制、身分制度、制限選挙、植民地制。  
「現状打破」の運動を不適切に <== テロ、武装蜂起、弾圧、言論統制、など。

#### 5.4 「自由」の土台となる「倫理」: 「基本的人権」と「本質的平等」の概念

「自由」が尊重されるためには、その「考え」や「行動」が、「倫理」に沿っていること、人間の「悪の心」ではなく、「善の心」から出たものであることが望まれる。実際的な指針は、「自由」の主張と競争の場に、「基本的人権」の順守を掲げること。すべての人々の「基本的人権」を守ることを「自由」の主張とその追求の大前提にする。

旧来の「道徳」が持つ、「服従・従順」を第一とする「倫理」観を脱して、「人としての本質的な平等」を大前提とする「倫理」観に進むことである。「画一的平等」ではなく、「人間の本質的平等」の概念と実践法の理解が必要。

#### 5.5 不十分な「倫理」(の理解)は、「愛」の精神・実践を損なう。

「愛情」を損なう <== 無関心、嫌悪、冷酷、虐待、など、

「助ける」を損なう <== 無視する、放置する、など、

「守る」を損なう <== 放置する、見て見ぬふりをする、など。

「調整」を損なう <== 非協力、無理解、冷淡、利己的、固執、拒否、など



## 5.6 「愛」の土台となる「倫理」： 心の中の「愛」と「広い心」

「愛」は、すべての人が持っている「心の優しさ」（「倫理」の一側面）を基礎とする。

それによって、人々と助け合う、協力する、調整することができる。

また、利己的な「自由」の主張を避け、「自由」と「愛」の対立要因を減らすことができる。

「愛」は、その対象を広げ、普遍化することを目指す。

その障害になるのは、「愛」自身のもつ「身内」意識（対象者を限定する意識）である。

「人間としての本質的平等」の「倫理」を持ち、人々とのコミュニケーションに努め、

社会・世界の状況を理解することが大事である。

## 5.7 経済的「格差」の問題と「富の再配分」の問題の認識

もう一つ注意すべきは、人間の欲望、特に金銭欲に際限がないことである。

現代世界では、金銭が「社会的勝者」を決める最大の要素である。

「富める者」こそ「社会的勝者」であり、彼らに都合がよい社会制度になっている。

それが資本主義経済であり、それを中核とした資本主義社会である。

これが日本でも世界でも大きな「格差」を生み、沢山の問題を引き起こしている。

この点を変革して、「富の再配分」を組み込んだ社会制度にするべきである。

これは「自由」のあり方の問題であり、「愛」の、「倫理」の問題でもある。

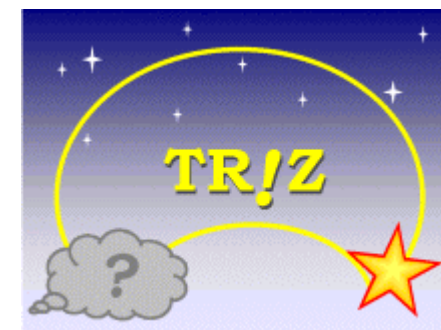
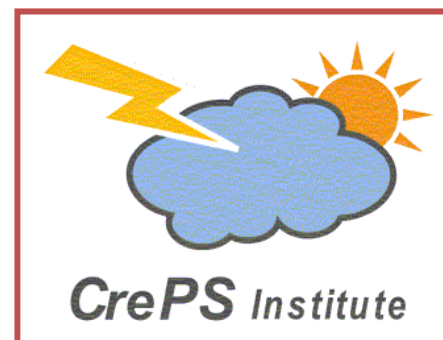
## まとめ:

本研究は、輻輳した社会的な問題、特に社会思想の問題に、  
創造的問題解決の方法論( TRIZ/CrePS)を適用した、第2報である。

前報(2016)で、「日本社会の貧困」の問題をとりあげ、問題の根底にある対立から、  
つぎの重要な基本仮説を見出した。すなわち、  
「人類文化は、「自由」を第1原理とし、「愛」を第2原理とするが、  
「自由 vs 愛」は、歴史を通じて未解決の「人類文化の主要矛盾」である。  
その解決の土台は「倫理」であろう。」

本報(2017)では、この基本仮説をさらに考察し、拡張・強化した。  
特に、個人(間)のレベルでの「自由・愛・倫理」の構造を考察した。  
「自由」および「愛」のさまざまな現れ方、それら内部の矛盾を考察した。  
さらに、「自由」と「愛」の間の対立・矛盾の諸形態を考察した。  
「善悪」を示す「倫理」の中身は歴史的に発展し、「人間の本質的平等」を  
基礎とする。「良心」(内心で善悪を判断する能力)が先天性である。  
主要矛盾「自由 vs 愛」を解く鍵が、「倫理」であることを明確にした。

TRIZ/CrePSのシステム思考と矛盾考察の方法を使って、さらにこの基本仮説  
の考察を進める。特に、グループ/組織のレベルの考察に進みたい。



ご清聴 ありがとうございます

中川 徹 (大阪学院大学 名誉教授)  
nakagawa@ogu.ac.jp

『TRIZホームページ』(和文・英文) 編集者  
<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

クレプス研究所 代表 『TRIZ 実践と効用』シリーズ 出版